

武田泰淳『森と湖のまつり』 における民族意識

土佐 圭司

本論文では武田泰淳の抱く民族意識から泰淳の理想としての民族の在り方とその論点が現代社会への民族問題とどのように直結しているかを考察したい。本論文では泰淳の代表的長編小説である『森と湖のまつり』に関して、作品の主要な問題であると思われる民族意識について考察していくこととする。

『森と湖のまつり』は一九五五（昭和三〇）年に『世界』八月号にて連載が開始され一九五八（昭和三三）年五月号まで連載された長編小説である。作品は若い画工である佐伯雪子の視点から展開されるアイヌ民族の衰退とアイヌ民族の日本人、あるいは日本民族への同化をしていく過程を描いた小説である。主な登場人物として「アイヌ統一委員会」という組織の池博士という人物や彼をめぐるアイヌの女性、日本人の女性との関連や、池博士の教え子でアイヌ民族として日本人への同化を徹底的に拒む風森一太郎という人物が登場してくる。作品の主要なコードとしては佐伯雪子の視点から捉えた、池博士と風森一太郎の対立を通じた日本人とアイヌ民族の対立関係であると思われる。そして、重要な点は風森一太郎が自らをアイヌ民族としてアイデンティファイしているにも関わらず、作中で実は日本民族の血統を保持しているというアイロニー

が描写されている。この作品を解釈するうえで先行研究では様々な読みが展開されているが、初期の評価として白井吉見はこの作品を長編小説として完結しているとして概ね高評価をしている。⁽¹⁾ 同様に佐伯彰一もこの作品については白井吉見と同様に高評価を付しているが、⁽²⁾ この作品について批判的な声としては日野啓三が指摘するように文学的な表現技法としてこの作品が「中途半端」であり作品の「曖昧」さが生じるのは「不可避」であるとした評価がある。⁽³⁾ 同様の見解として中村光夫による評価は作中の芸術家としての佐伯雪子における表現について上手く描ききれていないとし、なおかつ小説の方法論上としても欠陥があるとしてこの作品に対して批判的な指摘をしている。⁽⁴⁾ その後の論点としては兵藤正之助に代表されるような泰淳の代表的評論である「滅亡について」における文明観である諸行無常、栄枯盛衰といった観念がこの作品に投影されており、衰退していくアイヌ民族もまた日本民族に収斂されていくことに解釈の一端が置かれるようになる。⁽⁵⁾ 今日的には木田隆文に代表されるようなこの作品を一つの観光小説としての読みが展開されており、作品を通して舞台である北海道の大自然を感じることに作品の意義があると捉えられている。⁽⁶⁾ 主要な先行研究ではアイヌ民族や日本民族の明確な定義やそこから出発した論点があり散見されないことが指摘できる。

泰淳自身は内田吐夢との対談でアイヌ民族も日本人に同化されていくことに一つの民族の在り方を示し、この点で先程、先行研究で指摘されたような諸行無常、栄枯盛衰という観念でこの作品を描いた意図があることを示唆している。⁽⁷⁾

では、本論文では日本人、あるいはアイヌ民族の定義をある程度、明

確にしたうえで『森と湖のまつり』が持つ作品の意義を再検討していくものとする。

まず、日本人の明確な定義は現時点で生物学的な見地や様々な要素から考察したうえで明確な定義をすることは困難である。日本人を単一民族、あるいは多民族として定義しようとする試みは人類学、民族学などの見地から考察がなされているが、民族意識として福岡安則は血統、文化的アイデンティティ、国籍の三つから考察をし、血統、文化的アイデンティティ、国籍の全てが日本を意識している民族が純粋な日本人として定義することができるとしている。

では、福岡安則はアイヌ民族に対してどのような定義をしたかについても見解を考慮しなければならないであろう。福岡安則は血統、文化的アイデンティティの二つがアイヌを意識し、国籍のみ日本を指しているのがアイヌ民族だと定義している。

つまり、逆説的に言えばアイヌ民族の定義と同様な状況を想起している民族は純粋な日本人であるという解釈ではなく独自の民族意識を保持していることを考察することが可能になる。⁽⁸⁾ ベネダイクト・アンダーソンは「国民国家」の成立において国家とは想像された共同体であり、国家自身が民族における共通認識としての共同体であるとした。つまり、人々の文化的アイデンティティにより民族識別を行うことに近代ナショナリズムの本質があるとしている。⁽⁹⁾

日本人の民族における定義を考慮するうえで以上のような論点を考慮すると日本の民族体制の特徴が明らかになる。日本が戦時中に多民族国家であるということ肯定し、多民族を統合することで日本人は単一民族であるという説を展開していたことがあったが、この仮説に基づき日

本人ないし、日本民族の定義を試みると植民地支配における民族体制や日本人の優性を裏付けようとすることが可能となっていく。つまり、単一民族という神話や仮説を根拠にして、植民地における民族を強引に日本人ないし、日本民族として組み込んでしまうことが可能となる。日鮮同祖論や内鮮結婚の奨励による民族的同化や、日本民族白人説における日本人の優性を裏付けようとする論調がそれに該当する。ここに日本人の民族意識や定義の大きな問題があるように思われる。つまり、前出の血統、文化的アイデンティティ、国籍がランダムに意識の対象として日本やそれ以外の要素を認識しているかによって、それらのうちどれかが日本人への意識を保持させることで強引に日本人、あるいは日本民族への編入を可能とってしまう。⁽¹⁰⁾

戦後の日本においては日本人、あるいは日本民族の認識は象徴天皇制により日本人は血統、文化的アイデンティティ、国籍による日本人としてのアイデンティファイにより多民族統治とは異なる視点で日本人の単一民族性が浸透しているが、このような日本人における民族意識は比較考慮していくことは日本人の特殊性や日本人におけるアイデンティティを考慮するうえで欠かすことのできない歴史的な要素を含んでいると考えられる。⁽¹¹⁾

以上のように日本人の定義を試みることは歴史的な側面や日本民族を裏付ける決定的な根拠がない限り非常に難しいと思われる。ロビン・コーエンは『グローバル・ディアスポラ』⁽¹²⁾で流動的な民族単位でのグローバルな分布を考慮し、被害者ディアスポラ、労働ディアスポラ、帝国ディアスポラ、交易ディアスポラ、文化ディアスポラという識別を行いディアスポラ民族識別への布石を敷いた。

日本人は日系移民や海外定住の人々が存在するためにロビン・コーエンはこのような人々を一種の労働ディアスポラ、交易ディアスポラであるという分布をしている。アイヌ民族に対する歴史的な側面から考察すれば明治政府は北海道開拓を理由としてアイヌ民族の土地、つまり当時の蝦夷をロシアからの南下防止という名目で日本人の住む土地へと改造してきた。政策レベルではこのような介入は日本が朝鮮、台湾、沖縄への介入へと論理的に直結することをこの時点で色濃く残している。明治政府はアイヌ民族の住む蝦夷を日本化することを肯定的に捉えている。

日本人は西欧諸国からは排斥の対象として認知される民族でありながらアジアにおいてはむしろ差別し、支配をしようとする両義性を保持している。¹³ 岩谷英太郎はアイヌ政策として「撲滅主義」、「変種主義」、「秦皇主義」、「急進主義」、「漸化主義」の五つの政策主義を挙げ、後に「欧化主義」、「保存主義」、「同化主義」の三つを展開した。岩谷英太郎は「撲滅主義」と「変種主義」の二つは露骨な差別化と日本人への同化を施す論理だとし実現不可能なものとしたが、岩谷英太郎は「秦皇主義」（「保存主義」）、「急進主義」（「欧化主義」）、「漸化主義」（「同化主義」）の三つを検討している。¹⁴ 「秦皇主義」（「保存主義」）はアイヌの習慣、風俗を保存することに大きな重点を置いた。しかし、近代化を進めるうえでこのような論点は当時、整合性のとれたものではなかった。

近代化の波に対抗してアイヌ民族の精神性や習慣を保持していくことは当時の時代背景から考察しても困難であった。「急進主義」（「欧化主義」）はアイヌ民族にも積極的に民族的改良を行い欧化していくことを意味するが岩谷英太郎はこの論調をとらず、「漸化主義」（「同化主義」）によりアイヌ民族への対応をすべきだとした。この論理はゆるやかにア

イヌ民族を日本人へと同化させるべきだとした論調である。その方法としては後述する「北海道旧土人保護法」において実践されていく同化志向になるが、岩谷英太郎はアイヌ民族の日本人への同化をある程度、肯定的に捉えていたと言える。アイヌ民族を日本人化し、ゆるやかに同化させ保護することで日本人へと編入をさせ日本の領土の拡大を目指すことをそれは意味する。なおかつ欧米との競争においてアイヌ民族を前述の「急進主義」（「欧化主義」）で欧化していくことはアイヌ民族を欧米に包含させることを意味し適切ではないとし、アイヌ民族を日本人に編入させることと、欧米には同化させないという二重のパススペクティブを明治政府は考慮していたと言える。この論理は日本の近代が抱えている矛盾でもあった。

このような論理から当時の論調はアイヌ民族の日本人への同化あるいは漸化を進めるべきだとした論理が展開されていたようだ。時期を前後してこの論点が進行する中で「北海道旧土人保護法」が成立していく。

この法案の主な論旨は岩谷英太郎の「漸化主義」（「同化主義」）と根本を共有するものであり、明治政府という国家の体制を強固なものにするために領土の拡大を名目にしてゆるやかにアイヌ民族を学校教育や農耕の方法によって日本人化していくための手段としてこの法案を用いたと言える。このように政策レベルでのアイヌ民族の日本人化を当時の論調では肯定的に捉えており、この時点でアイヌ民族は日本人とは異なる価値観を持った民族であると当時の日本人は認知していたと言える。加えて明治政府は均質的な国民の創出を目指すことが急務であり、前出のベネディクト・アンダーソンの言う近代ナショナリズムにおいて「国民国家」の体制を整えるのは明治政府の大きな命題であり、アイヌ民族を

日本人に編入させようと試みたのだった。そして、他者としてのアイヌ民族という論点から考察すればアイヌ民族は近代以降、日本人からの強制的な政策を受ける被害が発生していると言える。¹⁵ つまりアイヌ民族はロビン・コーエンの言葉を借りれば被害者ディアスポラに該当すると判断できるだろう。主な論拠としてアイヌ民族は自らの精神性を日本人、あるいは日本民族としてアイデンティファイしておらず、精神性の依拠をあくまでアイヌ民族に求めている。加えてアイヌ民族であるということによって、生活を営むうえでの差別的な認識を受けてしまうこともあるようだ。¹⁶ つまり、日本においてアイヌ民族として生活していくことは容易ではないということが指摘でき、アイヌ民族の特殊性と日本人との差異を認知していくことが可能となるだろう。被害者ディアスポラ概念は様々なディアスポラの類型に共通している民族的迫害を受けていることが根底にあるが、アイヌ民族に対する明治政府の対応はゆるやかではあるが一方的な強制と迫害を伴っている。このことから考察してもアイヌ民族は一種の被害者ディアスポラとして判断できると思われる。

ではこのような論点から『森と湖のまつり』を解説するどのような解釈が展開できるのかについて論じていく。前述のディアスポラとしてのアイヌ民族に関する考察から検討すれば、泰淳の創作の意図とあいまってこの作品が衰退していく民族の栄枯盛衰、諸行無常という観念が投影された作品であるというのは正鵠を得ている。今日的な解釈である観光小説としての読みはこの点で作品の主題である民族意識としては若干、趣が異なると思われる。前述した日本人、あるいは日本民族とディアスポラとしてのアイヌ民族へと論点を広げていくと、この作品の主題

である民族の栄枯盛衰、諸行無常は単に日本における民族問題のみに留まらず、様々な解釈をしていくことが可能になる。東アジアにおいては日本のエスノセントリズムによる植民地支配に対する戦後の罪悪感や批判としてこの作品を解釈していくことは重要性が高いだろう。作品の主要なコードであるディアスポラとしてのアイヌ民族の抵抗という要素がここでは大きな意味を持つと思われる。日本は近代化していく際に西洋のイデオロギーを一方的に受容したが、その近代化における過程で民族意識における抵抗という概念が弱いことが指摘できる。隣国の中国はその点で民族意識の強さからくる回心や抵抗が日本より強力であったことを加味しておく必要がある。泰淳は「中国文学研究会」において中国認識や中国蔑視に対する是正や新たな中国認識を試みようとしたことは特筆すべき事項である。『森と湖のまつり』が提示する衰退していく民族における栄枯盛衰、諸行無常において風森一太郎のディアスポラとしてのアイヌ民族の徹底的な抵抗は日本人が近代化していく際に欠如していた姿勢であることを泰淳は意図的にこの作品に投影し、それを読者に提示していきかけたのではないかと考えられる。そして、最終的には風森一太郎の抵抗が実を結ばず、アイヌ民族が日本人、あるいは日本民族に収斂されていくことにより、現代的には近代化を問う際の「近代化することの善」という一方的な解釈や、中国の近代化の際の民族意識の強さからくる民族の主体性を強調した抵抗が結局、忘却されていることを示しているのではないだろうか。それにより逆説的ではあるが日本人、あるいは日本民族の主体的なアイデンティティの保持を強調し、近代化に伴うアジア認識において正当な理解を試みていくのに新たな創造的な見解を読者に抱かせることが可能になるのではないかと考えられる。

さらに重要な点は前述したように作品において風森一太郎は自らをアイヌ民族としてアイデンティファイしているが、実は日本民族としての血統を保持しているという告発が風森一太郎の知らぬ際になされている。このことから自己アイデンティティによる精神性において風森一太郎はアイヌ民族でもなく、また日本民族でもないという二律背反性を保持した作品の重要人物として描写されている。

作品においての風森一太郎の民族意識を根底にした抵抗はカオスとして描かれているが、カール・シュミットはこのような権力状態の混沌を法の統治外にある「例外状態」として定義した。¹⁷ 作品の「例外状態」を招く役目である風森一太郎はある種の民族的超越性を保持している。

ジョルジュ・アガンベンは「例外状態」においてこのような法的な罰則もされず、宗教的な束縛もされぬ両義性を持ち権力を寡占し（生）の状態を剥き出しにする役目を担う人間を古代西洋に存在した「ホモ・サケル（聖なる人間）」として定義した。¹⁸ 風森一太郎の精神性における両義性と二律背反性、そしてその民族的自我の超越性はアガンベンの言う「ホモ・サケル（聖なる人間）」に該当するのではないだろうか。泰淳は風森一太郎の民族的自我の超越性に前述した日本人に欠けている精神的な側面での強い民族意識を託し描写することで固定化された強い民族意識を投影したという創作の意図を重ねて考えることが出来る。それは単一、あるいは多民族統合による単一民族であるとした不明確な日本人という定義と解釈に対して深い洞察を試みたものであり、前述の論点では日本人の民族意識がアジア内部では弱いと指摘したが、日本内部での民族意識は日本人という概念が多数の強固な民族意識の衝突により成立しているとした論点を、この作品は問題意識として投与していると言える

るだろう。

また広義のグローバルな民族問題を考慮すれば『森と湖のまつり』における日本人、あるいは日本民族とアイヌ民族との民族的対立を様々な民族問題への援用をする接合点を見出すことが可能となる。

泰淳の「滅亡について」の本文を引用して考察を試みたい。

滅亡は私たちだけの運命ではない。生存するすべてのものにある。世界の国々がかつて滅亡した。世界の人種もかつて滅亡した。これら、多くの国々を滅亡させた国々、多くの人種を滅亡させた人種も、やがて滅亡するであろう。滅亡は決して咏嘆すべき個人的悲慘事ではない。もつと物理的な、もつと世界の空間法則にしがつた正確な事実である。星の運行や、植物の成長と全く同様な、正確きわまりなく、くりかえされる事実にすぎない。この大きな構成物は、人間の個体が植物や動物の個体たちの生命をうばい、それを噛みくだきのみくだし、消化して自分の栄養を摂るように、ある民族、ある国家を滅亡させては、自分を維持する栄養をとるものである。¹⁹

このことから泰淳の民族意識は非常に広い範囲を捉えており、決して日本やその周辺地域のみを民族問題を指しているのではなく地球規模での人類の歴史やそれに関する民族の滅亡、誕生、興隆、衰退といった文明観を表現していることが理解できると思われる。

本論文では武田泰淳の『森と湖のまつり』を題材として、それをめぐる民族意識や広義でのアジア認識ないし中国認識について先行研究が

フアジーにしてきた要素である日本人、あるいは日本民族やアイヌ民族に対する意識や精神性、それに付随する歴史的な観点から作品を読み解くことで先行研究とは異なった視点で作品を捉える解釈を提示できたのではないかと思われる。また『森と湖のまつり』という作品が訴えかけている民族問題やそれに関する民族意識は今日的にも特定の地域のみならず世界規模での民族問題において非常に重要な意味合いを含んでいると考えられる。グローバル化する民族状況において東アジアにおける日本人の民族体制を理解するのにディアスポラを論点として文献を解読することで様々な地域における民族問題への建設的な論点を東アジアにおけるケースとして考慮することで民族問題において重要な視点を提供することが可能となるだろう。

そして、このような視点が政策レベルでの民族問題への解決に何らかの要素として文化的摩擦の緩和を促すものとしてプラスになっていくことは渴望されるべき民族問題への解決の糸口である。

〈注釈〉

- (1) 白井吉見「完結した武田の力作」『朝日新聞』一九五八年四月十六日
- (2) 佐伯彰一「近年にない魅力小説」武田泰淳著『森と湖のまつり』『北海道新聞』一九五八年七月十七日
- (3) 日野啓三「森と湖のまつり」について『近代文学』一九五八年九月
- (4) 中村光夫「現代の長篇小説―『森と湖のまつり』をめぐって―」『声』一九五八年十月
- (5) 兵藤正之助「泰淳の死および『森と湖のまつり』をめぐって―地獄を見詰めた作家の「諸行無常の定理」」武田泰淳論 昭和史に閃爍する作家 冬樹社 一九七八年

- (6) 木田隆文「武田泰淳『森と湖のまつり』の言説圏―『観光』小説を視座として―」『龍谷大・国文学論叢』二〇〇四年二月
- (7) 武田泰淳・内田吐夢(対談)『文学と映画の間『森と湖のまつり』を中心に』『キネマ旬報 二月上旬号』一九五八年
- (8) 福岡安則「在日韓国・朝鮮人」中公新書 一九九三年 五ページ図二を参照
- (9) ベネディクト・アンダーソン(著) 白石さや・白石隆(訳)『増補 想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行』NTT出版 一九九七年
- (10) 小熊英二「単一民族神話の起源(日本人)の自画像の系譜」新曜社 一九九五年を参照
- (11) 注釈(10)と同文献を参照
- (12) ロビン・コーエン(著) 駒井洋(監訳) 角谷多佳子(訳)『グローバル・ディアスポラ』明石書店 二〇〇一年
- (13) 小熊英二「(日本人)の境界 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで」新曜社 一九九八年 五六ページを参照
- (14) 注釈(13)と同文献 六三―六六ページを参照
- (15) 注釈(13)と同文献 六六ページを参照
- (16) 関口由彦「首都圏に生きるアイヌ民族―「対話」の地平から」草風館 二〇〇七年を参照
- (17) カール・シュミット(著) 田中浩・原田武雄(訳)『政治神学』未来社 一九七一年
- (18) ジョルジョ・アガンベン(著) 高桑和巳(訳)『ホモ・サケル 主権権力と剥き出しの生』以文社 二〇〇三年
- (19) 武田泰淳「滅亡について」『武田泰淳全集 第十二巻』筑摩書房 一九七二年 九二―九三ページから引用

〈主要参考文献〉

- 小熊英二『単一民族神話の起源(日本人)の自画像の系譜』新曜社 一九九五年
- 小熊英二「(日本人)の境界 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰

- 運動まで』新曜社 一九九八年
- カール・シュミット(著) 田中浩・原田武雄(訳)『政治神学』 未来社
一九七一年
- 川西政明『武田泰淳伝』講談社 二〇〇五年
- ジョルジョ・アガンベン(著) 高桑和巳(訳)『ホモ・サケル 主権権力と剥き
出しの生』 以文社 二〇〇三年
- 関口由彦『首都圏に生きるアイヌ民族―「対話」の地平から』 草風館
二〇〇七年
- 武田泰淳『武田泰淳全集 第七卷』筑摩書房 一九七二年
- 武田泰淳『武田泰淳全集 第十二卷』筑摩書房 一九七二年
- 東村岳史『戦後期アイヌ民族―和人関係史序説―1940年代から1960年
代後半まで』三元社 二〇〇六年
- 兵藤正之助『武田泰淳論 昭和史に閃爍する作家』冬樹社 一九七八年
- 福岡安則『在日韓国・朝鮮人』中公新書 一九九三年
- ベネディクト・アンダーソン(著) 白石さや・白石隆(訳)『増補 想像の共同
体―ナシヨナリズムの起源と流行』NIT出版 一九九七年
- ロビン・コーエン(著) 駒井洋(監訳) 角谷多佳子(訳)『グローバル・ディア
スポラ』明石書店 二〇〇一年

(とさ けいじ・本学修士課程人文科学研究科国際文化専攻)